

1. 研究主題

思いや考えをもち、共に学び合い、のびゆく子どもの育成 ～国語科、社会科、総合的な学習の学びを深める ICT 活用～

2. 主題設定の理由

(1) 教育の今日的課題から

新しい学習指導要領等が目指す姿は「生きる力」の理念の具体化である。それは、情報化やグローバル化など人間の予測を超えて進展する社会的変化の中で、子どもたちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に備えることのできる学校教育を実現することである。様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断しながら、自分を社会の中でどのように位置付け、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力の育成が社会的な要請となっている。育成すべき資質・能力の 3 つの柱として、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」が挙げられている。これらの資質・能力を育成するために、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を考えていく必要がある。

PISA や全国学力・学習状況調査の結果からは、文章の構成や内容を理解して解答すること、適切な根拠に基づいて説明することなどに課題が見られる。また、授業におけるコンピュータの使用状況が国際的に見て低い傾向にあるため、コンピュータの画面上で考察したり、情報を整理・再構成したりする機会が少ないことも課題である。学習指導要領改訂のポイントにおいても、その他の重要事項「情報活用能力（プログラミング教育を含む）」について、①コンピュータ等を活用した学習活動の充実（各教科等）②コンピュータでの文字入力等の習得、プログラミング的思考の育成（算数、理科、総合的な学習の時間など）が挙げられている。

こうしたことから、基盤となる言語能力（語彙力・読解力）・情報活用能力の育成を図ること、さらに、生きて働く（社会における様々な場面で活用できる）知識・技能の習得のため主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の質的改善が必要であると考ええる。

(2) 学校教育目標から

本校では、「豊かな心と自ら学ぶ意志をもち、変化の時代を生き抜くたくましい木次の子の育成」を教育目標に掲げ、次の 4 つのめざす子ども像（校訓）を柱に教育活動に取り組んでいる。

「剛健」…たくましくがんばる子

「知力」…じっくり考える子

「勤労」…進んで働く子

「友愛」…あたたかい心で助け合う子

そして、「みんなで成長する楽しい学校」を合言葉に、自己肯定感の育成、意志ある学びの実現による「知」「徳」「体」のバランスの取れた子どもの育成に向けて、「チーム木次小」として全教職員一丸となって取り組んでいる。今年度の重点は以下のとおりである。

【知】確かな学力の向上～ ICT 活用

- ・教師の授業力の向上
- ・教師が使う ICT から子どもが使う ICT へ
- ・校内研究の推進
- ・未来教育プロジェクト学習の導入

【徳】豊かな心～温かい人間関係

- ・一人一人が大切にされ、認められる学級づくり、学校づくり
- ・特別活動や全校活動の改善（精選と進化）
- ・人権意識の向上

【体】すこやかな心と体～心と体の健康

- ・体力作りの推進
- ・家庭と連携した基本的生活習慣の確立
- ・安全教育の充実

【家庭・地域との連携による教育の推進】

- ・積極的な情報発信（学校だより、ブログ）
- ・ふるさと教育の充実（地域 CN との連携）
- ・地域の教育力の活用

（３）児童の実態から

本校は全校児童 217 名、学級数 12（特別支援学級を含む）の中規模校である。平成 26 年 4 月に温泉小学校と統合し、現在は 15 名が温泉地区からスクールバスで通学している。

校区は雲南省のほぼ中心に位置し、すぐ近くには、日本桜名所百選に選定された斐伊川堤防の桜並木があり、四季折々の美しさを感じることができる。また、校区には JR 木次駅、市立図書館などの主要施設があるほか、古くからの商業が栄えた街並みも残っている。

児童は素直で、何事にも前向きに取り組もうとする。掃除や遠足・運動会など、全校縦割り班（あきば班）による様々な活動を行っており、学年の枠を超えて仲良く協力して活動に取り組むことができる。また、児童会を中心としたあいさつ運動の取組により、大きな声で気持ち良く挨拶できる児童が多い。

学力状況調査の結果からは、基礎的・基本的な内容についての理解は概ねよいが、活用力が問われる問題に弱みがあることが分かった。特に、文章が長いと何を言おうとしているのかを読み取ることができなかったり、根拠となる叙述を見つけることができにくかったりする傾向が見られる。

また、自分の気持ちを言葉で伝えることや、自分の考えをみんなの前で話すことに抵抗を感じる児童が多い。（理由を言うことが苦手、少人数での話し合いなら意見が言える）

学習に対して意欲的に取り組む児童とそうでない児童に分かれる学習意欲の二極化の傾向、学力の二極化傾向が見受けられる。学習に対する苦手意識が強い児童、発達障がいを含め、個別の支援が必要な児童がどの学年にもいる。

コンピュータの活用については、以前はローマ字による文章入力、検索エンジンでの資料収集などに偏りがちであったが、平成 28 年度からのタブレット端末の導入により、写真や動画の撮影、資料の共有・選択など、学習での活用場面が広がってきている。ただし、プレゼンテーション等の表現に関わる活用はまだ多くない。

（４）昨年度までの取組から

昨年度は 1 年次として、基盤となる授業の流れやノート指導、掲示等の教室環境といった授業づくりや学習態度の育成について全員で共通理解を図った。そして、各教室にある壁掛けプロジェクター、書画カメラ、教師用のタブレット端末の環境を生かし、主に教師が活用する場面を中心に研究実践に取り組んできた。プロジェクターで大きく映し出すことは、支援が必要な児童にとって有効な視覚支援となり、学習に意欲的に取り組めるようになった。また、ノートをそのまま拡大して提示することで、すぐに発表ができ、効率的な授業展開につながった。さらに、ICT 機器の活用により、児童が課題を発見しやすくなったり、集中して学習に取り組んだりできるようになり、基礎的・基本的な知識・技能の習得に一定の成果が見られた。しかし、必要な情報を自ら集めたり、課題解決の提案の際に、その根拠となる情報を説明したりすることが苦手な児童がまだ多い。これは、

児童の情報活用能力の育成を意識した授業がまだ十分ではないからであると考える。

2 年次となる今年度は昨年度の研究の継続に加え、系統的な情報活用能力の育成カリキュラムを見直し、タブレット端末を活用した授業モデルを考えると共に、課題設定—情報収集—整理・分析—まとめ・表現という一連の単元構成を取り入れ、相手や目的を意識して必要な情報を選んだり、根拠を示して伝えたりする課題解決型の学習を進めていきたい。低学年では語彙力・読解力という学びの基盤を育てるために国語科を研究教科とし、中学年では日常生活に密着した内容での課題解決学習として社会科を、高学年では教科横断的な視点での課題解決学習として総合的な学習の時間を研究教科として、「思いや考えをもち、共に学び合い、のびゆく子」の育成にあたりたい。

また、研究成果についてきちんと評価しながら実践を積み重ねていくために、児童に身に付けた力や課題を焦点化し、評価指標を設定して研究に取り組みたい。

3. 研究主題の受け止め

(1)「思いや考えをもち」とは、

- ・言葉に関心をもち、自分の言葉で考えようとする
- ・自ら課題を見出し、向き合おうとする
- ・課題に対して、自分の思いや考えを自覚する
- ・根拠や理由を明確にして、表現しようとする

(2)「共に学び合い」とは、

- ・自分の思いや考えを伝え合おうとする
- ・友達の思いや考えを認め、自分の考えと比べて聞いたり考えたりしようとする

(3)「のびゆく子」とは、

- ・友達と思いや考えを伝え合う中で、自分の考えを深めたり、新たな考えを見出したりする子
- ・他の考えと関わることによって、集団としての考えを発展（深める・広げる）させていくことができる子
- ・お互いの思いや考えをもとに学習を深め、分かり合う喜びを感じる子

4. 研究目標

「思いや考えをもち、共に学び合い、のびゆく子」を育成するために、課題解決型の学習の中で ICT をどのように活用すればよいか、授業実践等を通してその効果的な活用のあり方を明らかにする。

5. 研究の視点と内容

○視点(1) 学ぶことに興味や関心をもち、課題解決への見通しをもって学習に取り組めば、自分の思いや考えをもち、主体的に学習に関わろうとする子が育つであろう。

- ①教材・学習課題との出会いの場の工夫
- ②ねらいや学習課題、学習の流れの明確化
- ③まとめや自己評価・相互評価による振り返りの場の設定

○視点(2) 子ども自身の思考や表現に結びつくような学習の場（学習プロセス）を工夫すれば、お互いの思いや考えを共有し合い、さらに深めていこうとする子が育つであろう。

- ①個人思考を深める手立てや位置づけの工夫

- ・ワークシート、ノート指導、資料の提示、操作活動等
- ②ペア学習やグループ学習など、思いや考えを表現する場の工夫（思考過程の共有化）
 - ・具体的な言語活動の工夫
 - ・話し合いの形態の工夫

○視点（３）**情報活用の視点を明確にし、学習の中で児童がＩＣＴを活用する場面を設定すれば、課題解決に向けて思考・判断し、表現する力が育つであろう。**

- ①情報収集、整理分析場面でのタブレット端末の利用
 - ・情報の整理、根拠や理由場面の撮影等）
- ②グループ学習での共同学習ツールとしてのタブレット端末の活用
 - ・ロイロノート等の授業支援ソフト、プロジェクター投影アプリの活用等
- ③発表場面で、根拠資料としてのタブレット端末の利用
 - ・Pen Plus Classroom 等の授業支援ソフト、プレゼンアプリ、写真、動画の活用等）

6. 研究組織

（１）研究職員会〈全教職員〉

（２）研究部会〈内田、松岡、藤田、杉原、久我〉

（３）学年部会

①低学年部会〈内田、飯島、永井、松岡、丹波、渡部〉	}	校長、教頭
②中学年部会〈藤田、飯塚、森山一、森山幸、堀江美、槇原〉		
③高学年部会〈今岡、持田、久我、杉原、周藤、小笠原〉		

（４）専門部会

- ①授業研究部〈○内田、飯島、飯塚、今岡、持田〉
 - ・・・タブレット端末を使った授業モデルを考え、授業研究により検証していく。
 - 研究教科の全体計画の見直し、身につけたい力の検討等
- ②ICT 推進部〈○松岡、丹波、森山一、久我、校長〉
 - ・・・タブレット端末の活用機会を増やす工夫を考えたり、授業での活用方法について職員研修を計画し、実施したりする。
- ③学力育成部〈○藤田、堀江美、永井、周藤、小笠原〉
 - ・・・各学年で身につけたい情報活用能力の具体的な評価指標を作成したり、児童の実態調査を作成・集計したりして、児童の変容をとらえる。
- ④運営部〈○杉原、森山幸、渡部、槇原、教頭、（堀江恵、市場）〉
 - ・・・研究成果の情報発信や、授業研究会への参加の呼びかけ、自主発表会の実施計画の作成などを行う。

8. 研究の経過

月	研究の内容（研究授業・研究職員会・校内研修会等）	学年部会等
4	4／ 16（月） ・これまでの研究経過と今年度の研究の方向性について	5／28（月） 3年社会科模擬授業
5	5／ 7（月） ・研究の視点と内容、研究組織について ・研究授業の実施について	
	5／21（月） ・5月30日研究授業指導案審議	
	5／30（水） <u>中川先生訪問指導</u> ・・・3年社会科（飯塚教諭）	
6	6／18（月） <u>特新担訪問指導</u> ・・・8組自立活動（松岡教諭） ☆出雲教育事務所 山本勉指導主事 ・校外からの参加者 15名	
7	7／9（月） ・ICT研修、専門部会からの提案	
	7／24（火） <u>夏季校内研修会①</u> （専門部会、学年部会）	
	7／31（火） <u>県メディア教育研修会</u> （本校）	
8	8／24（金） <u>夏季校内研修会②</u> ・10月自主研究会（1年国語、6年総合的な学習）の学習指導案審議 ・校内ICT研修 …1学期の実践事例紹介、研修・視察報告、ICTを使ったミニ授業	
9		
10	10／15（月） ・自主研究会の準備確認	1年国語、6年総合…学年部での指導案審議、修正 10／19（金） 1年国語事前授業（1年1組 内田） 11／9、10 JAET 全国大会（川崎）5名 12／10（月） 4年社会事前授業（4年1組 森山ー）
	10／25 <u>自主研究会（1年国語 安食教諭）</u> <u>（6年総合的な学習 今岡教諭・持田教諭）</u> ー公開授業、研究協議、全体会ー ☆中川一史放送大学教授 ☆鈴木敏恵先生	
11	11／ 5（月） ・研究集録の様式について 11／12（月） ・5年理科指導案審議	
	11／26（月） <u>初任研訪問指導</u> 5年理科（久我教諭） ☆深田剛生指導主事 ☆西裕里指導主事	
12	12／17（月） ・研究集録の作成、今年度の取組の反省について	
1	1／ 8（火） ・1月17日授業の指導案説明	
	1／17（木） <u>中川先生訪問指導</u> 4年2組社会科（藤田講師）	
2	2／18（月） ・来年度の取組に向けて	

今年度も、昨年度に引き続き「思いや考えをもち、ともに学び合い、のびゆく子の育成」を目指して研究実践に取り組んだ。課題解決型の学習の中で、ICT機器を効果的に活用して、児童の学びが深まる授業となるように、(低)国語、(中)社会、(高)総合的な学習の時間を中心に授業実践を行った。

研究の視点に沿って成果と課題を整理・分析することで、来年度のJ A E T全国大会に向けた取組の重点を明らかにしていきたい。

1. 研究の成果

★視点(1)

学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって学習に取り組めば、自分の思いや考えをもち、主体的に学習に関わろうとする子が育つであろう。

① 教材・学習課題との出会いの場の工夫

教師が作成した見本を見せる、地域講師の話を聞く機会を設ける、特産品の食べ比べをさせるなど、学習のゴールを具体的にとらえさせたり、学習課題を意識させたりするなどの単元の導入の工夫によって、児童の学習への興味・関心を高めることができた。

また、図書資料や読書カードを準備したこと、学習課題解決の素地になる部分の準備ができるような時間を十分に保障したことも、児童が自分の考えをもち、主体的に学習に取り組んでいく姿につながったと考える。今後も、児童の実態に合った学習課題を設定するために、単元の導入の重要性を意識して単元構成を考えていきたい。

② ねらいや学習課題、学習の流れの明確化

学習課題を明確なものにするために、導入時の体験から生じた疑問を整理・分析することも調べ学習では大切であることが分かった。そこから、児童の興味・関心に合った学習のゴールを設定し、ゴールまでの道筋を示すことで、意欲的に学習に取り組むことができる。学習のゴールは、学年・教科によって様々だが、相手意識・目的意識をもって取り組めるように具体的な活動を設定することが大切であることを再認識することができた。

ゴールまでの道筋を学習計画として示し、作成途中の物や前時までの資料を掲示したりプレ発表を見合ったりすることも、児童の探究意欲を持続させるために大切にしていきたい。

③ まとめや自己評価・相互評価による振り返りの場の設定

授業の始めにその時間の目標を決め、終わりに自己評価を記入することで、次の時間の課題を明らかにすることができた。毎時間同じように自己評価をする時間をとることは難しいが、学年に応じた方法で、まとめと振り返りの時間を確保していきたい。

★視点(2)

子ども自身の思考や表現に結びつくような学習の場(学習プロセス)を工夫すれば、お互いの思いや考えを共有し合い、さらに深めていこうとする子が育つであろう。

① 個人思考を深める手立てや位置づけの工夫

国語科では、教科書の文章への書き込みや色分けなどで自分の考えを「可視化」することは、ワークシートへの書き込みの前のワンステップとなった。学習活動をスモールステップで進めていくことは、学習への取り組みにくさを軽減する支援となる。

単元の目標から調べる視点を焦点化して提示することで、児童にとって学習活動が具体的で取り組みやすいものになった。また、発表練習の際に「発表のコツ」を示すことで、自身の取組や友達にアドバイスする際の観点を具体的に意識することができた。

② ペア学習やグループ学習など、思いや考えを表現する場の工夫(思考過程の共有化)

グループ学習の中で役割分担をすることで、それぞれが自分の役割を果たしつつ、お互いの情報を共有し合いながら調べ学習を進めることができた。また、グループ学習の中にペア学習を

取り入れたことで、収集した情報の中から必要な情報を選び出したり、分かりにくい言葉を言い換えたりする際に、2人で相談することができた。グループ学習であっても、学習内容によってはペア学習を取り入れるなど、場に応じて学習集団を組織していきたい。

★視点（3）

情報活用の視点を明確にし、学習の中で児童がICTを活用する場面を設定すれば、課題解決に向けて思考・判断し、表現する力を育つであろう。

① 情報収集、整理分析場面でのタブレット端末の活用

タブレット端末で写真撮影をさせたが、画面が大きく、グループの数人で一緒に画面を見ることができ、角度やズームなどの操作もしやすく、児童は意欲的に活動に取り組んでいた。また、ホームページでの検索や、プレゼンテーション用の画像を引用することもできる。発表の資料として職場見学での写真撮影、動画撮影など、目的意識をもってタブレット端末を使用していた。

② グループ学習での共同学習ツールとしてのタブレット端末の活用

ロイロノートの活用では次のような活動を行うことができた。

- ・グループごとにタブレット画面に書き込みながら話し合い、変更点があれば容易に書き換えることができるため、児童は積極的に書き込みをしていた。
- ・児童のタブレット端末の写真を指導者のタブレット端末で一括管理できるため、児童の学習状況を把握して、その後の授業展開に生かすことができた。
- ・タブレット端末内に画像や動画などの情報をまとめて保存し、プレゼンテーションの資料作りに利用することで、児童はグループ内で情報交換しながら活動を進めていくことができた。

③ 発表場面で、根拠資料としてのタブレット端末の利用

まとめる場面で児童が作成した発表資料をタブレット端末に保存し、画像をスクリーンに大きく映し出したことで、発表者が何について発表しているかが分かりやすかった。児童がタブレット端末にロイロノートでアドバイスを書き込んだものを、教師のタブレット端末に集約しスクリーンに映し出したことも、それぞれの考えを共有するために効果的であった。

2. 今後の課題

【学習課題の設定、見通し】

- ・教科学習の目標を達成するために教師が考える学習のねらいを、具体的で焦点化したものとして児童に提示できるようにしたい。そのために、各教科で求められる「見方・考え方」について、教師がより深く理解し、「どんな力をつけさせたいのか」、「どんな学習課題がふさわしいのか」等を児童の実態に即して吟味しなければならない。

【個人思考、集団思考】

- ・ペア学習、グループ学習の中で話し合いを深めることができるように、教師が話し合いの視点を具体的にもち、児童が、「何のための話し合いか」を意識できるようにしていきたい。
- ・全体で考えを共有し合う際に、聞き合うだけでなく、考えを練り合わせていけるように、教師は授業技術をさらに磨いていく必要がある。

【ICT機器の活用】

- ・今年度の実践では、研究教科以外の教科でも、タブレット端末をはじめとしたICT機器を児童が積極的に活用して学習活動を進めていく姿が見られた。しかし、情報モラル指導の体系化や系統的な情報活用能力の育成についての共通理解が十分とは言えない。

3. 来年度の研究実践に向けて

いよいよ来年度は、「JAET全国大会」の年である。町内他校との協力体制を構築しながら、木次小学校として、研究の目的を明確にして研究実践に取り組んでいきたい。教科の特性を見据え、ICT機器を活用することで広がる児童の学びをより深めていけるように、一つ一つの授業に真摯に向き合い、10月18日に「チーム木次小」としての研究成果を披露できるようにしたい。（文責 内田）